

# チユルク族の始祖傳説について

——沙陀朱耶氏の場合——

岡崎 精 郎

【梗概】 チユルク族の始祖傳説が、ウラル・アルタイ諸族の中、ツングース、モンゴル諸族のそれと相對比して攷えらるべきものをもつことは、すでに認められている。しかもチユルク族始祖傳説の中、その基本類型とみられる狼人交合傳説の他に、ここに披り沙陀朱耶氏の始祖傳説は全然異なる、鳥の始祖養育の面をもつのであり、これはチユルク族以外にも廣く見出されるものではあるが、チユルク族としては、はるか鳥孫の昆莫傳説との間に連繫が見出される。しかも朱耶氏の始祖傳説をつたえる記載が、南部新書と五代史補の兩書の間にながりの相違點をもつことも問題となる。すなわち、南部新書の記載では鳥の始祖養育をいうに對して、五代史補の記事では鴈窠における異常出生をいうにすぎず、この間、漢人記録家による外族始祖傳説の合理化が考えられるのである。

げたい。それによれば、

①高車・突厥などチユルク民族間に傳えられる狼人交合の傳説

北方諸民族の始祖傳記に關しては、夙に内藤虎次郎博士の論考をはじめとし、先學の研究が重ねられているが、今その要約として、嘗て田村實造博士の試みられた分類を

②扶餘・高句麗・百濟あるいは滿洲族（清朝）など、主としてツングース系とみなさるべき諸族の間に流布する無夫感生の傳説

③蒙古の開國傳記として元朝秘史にみえる「狼鹿配偶お

よび無夫感生」すなわち①②を併有する複元傳説

とされる。以上は古來北方民族の間に傳承された始祖傳説の三基本類型であり、チュルク族の場合、最初の型に屬するわけであるが、ここにとり上げる西突厥の別部、沙陀の朱耶氏の始祖傳説は一應この類型より除外さるべきものであり、ここに若干の考察を加へてみたい。

## 二

朱耶氏發祥の傳説は、宋の錢易の南部新書と、やはり宋の陶岳の五代史補とにみえて、文面にはかなりの差異が認められる。すなわち、南部新書、癸卷（興雅堂叢書本による）には

朱耶赤心、或るひとはいう、その先は塞上の人にして、騎獵を以て業となすもの多し、胡人三十輩、大山の中において飛鳥甚だ多く一谷の中に頽頽せるをみる、衆胡これにおもむくに一小兒をみたり、およそ二歳なり、衆鳥

チュルク族の始祖傳説について（岡崎）

果實を銜みてこれを飼う、衆胡これを異なりとし、遂に收め、衆遞いにこれを養う、長じて姓を求む、衆いう、諸人共に育てて人たらしむるを得たりと、遂に諸爺を以て名となす、朱耶というは誤れりと。

とみえ、五代史補卷第二、後唐・太祖號獨眼龍の條（豫章叢書本による）には

太祖武皇はもと朱耶赤心の後、沙陀部の人なり、その先は雕窠の中に生る、酋長その生を異にするをもつて、諸族にこれを傳え養はしむ、遂に諸爺をもつて氏となす、一父の養うところに非ざるをいふなり、その後言譎り、諸をもつて朱となし爺をもつて耶となす、

とある。南部新書の記載は朱耶赤心（李國昌）を中心とし、五代史補の記事は武皇李克用を起興としているが、傳説自體にとつて、それは殆ど問題でない。傳説そのものの検討を兩書の記事の比較において進めよう。

まづ諸爺氏について攷える。「諸人共に育てて人たらしむるをえ」（南部新書）、あるいは「一父の養ふ所に非ざる」（五代史補）が故に諸爺の姓をえたとする點は、表

現の差こそあれ、兩書略同じいが、五代史補では諸爺が轉じて朱耶になつたといひ、南部新書では朱耶は誤で正しくは諸爺に作るべきことを説く。朱爺については別に處月に關係づけんとする説もあるけれども、一體 (tan name) たる朱耶は、*tribe name* と異り、他族より附與された稱呼ではなく、從つてそれは中世チユルク語を以て解かるべきこと勿論であつて、諸爺といふ漢語をあてて中國側よりする稱呼とするが如きは到底受容しえない。李文田も南部新書の斯説をすててとらなかつたが（雙溪醉隱集・涿邪山の箋）、要するに朱耶・諸爺説は中國記錄家の附會以外の何物でもありえない。朱耶氏は一に朱邪氏に作られ（新唐書卷二一八沙陀傳、五代史記卷四唐本紀など）、中國史籍には永徽初以後屢見するが、この姓の由來については新唐書沙陀傳にも説く所がない。通志卷二九、氏族略・代北複姓條に「沙陀氏」とて、部名沙陀を姓として數えたのは、同時代のチユルク諸族通有の部族名の氏族名への轉化とみられるが、沙陀は部名としては唐の太宗の時、沙陀都督府設置の際に初見するのであり（舊五代史卷二五武皇紀上）、朱耶の氏族

名はその起源をさらに溯るに遡るに違ひないが、しかも朱耶姓については元和姓纂・通志氏族略共に語る所なく、南部新書・五代史補の記載もついに朱耶の解釋に資するなく、朱耶の解決への手がかりは全くない。併しながら、兩書に記している、朱耶氏の始祖が衆胡あるいは諸族の間に轉々養われたとの傳承は、あるいは朱耶氏先世の史實と關連をもつものではあるまいか。小野川秀美氏が沙陀部に關し、それは「單一なる部落でなく、沙陀磧の近くに流移して、處月の傍にいた雜種の總名として與えられた名稱に由來する」<sup>⑤</sup>との假説を提示されたのは同羅・僕骨の人を分つて沙陀都督府をおいたとの事實の他、永徽五年、處月の地に金滿・沙陀二州の設置事件、さらに沙陀の先世が東突厥の蘇農氏なりとの推測の上に立たれたものであるが、この部民の流移、流移の間における朱耶氏擡領の事實が、先の傳説の、朱耶氏の始祖轉々の傳えと相關連して推測しえないであろうか。傳説は神話と異り、事實をそのグルンダにもつのであり、始祖傳説については、例えば島田好氏が荒誕の一語の下に葬られていた三國史記高句麗本紀の高句麗始祖傳説の中に東

扶餘開國の史實を指摘されたのも参照せられよう。

なお宋耶氏の始祖を語るものとして舊五代史卷二五武皇紀上に、武皇李克用に關し、「その先は隴右金城の人なり、始祖拔野、唐の貞觀中、墨離軍使となり、太宗に従い、高句麗、薛延陀を討つて功あり、金方道副都護となり、よつて瓜州に家す」といひ、五代會要卷一、追諡皇帝の條に、「後唐の懿祖昭烈皇帝、諱は執宜」とあり、その割注に「(執宜は)沙陀府都督拔野六代の孫」とみえる拔野の記事が一應問題となるけれど、朱耶氏なる氏族の始祖は本質的には歴史的な祖先ではないとすべく、拔野の如き歴史的祖先を以て、始祖傳説に關連づけるべきであるまい。

### 三

さて、朱耶・諸爺の問題を了え、傳説の本流に入る。ここで南部新書、五代史補兩書の記載の出入であるが、南部新書の筆者錢易、および五代史補の撰者陶岳は何れも北宋眞宗朝前後の人にして(宋史卷三一七錢易傳、五代史補自

序)、兩書の成立年代も、南部新書は「大中祥符間」(四庫提要卷一四〇)、五代史補は「(大中)祥符五年」(同上卷五一)とされ、きわめて相近い。にも拘らず、かくも記載内容を異にするについては記事批判にまつ他はない。

まづ、朱耶氏の始祖え働きかけたものとして、南部新書の胡人、衆胡が問題となる。胡・胡人の文字が唐代において主にイラン人(九姓胡)を指稱したことはすでに定説となつてゐるが、しかし降つて宋代においては塞外人を指して胡・胡人の字面を屢々使用するにいたるのであつて、錢易もその例にもれず、やはり北族を意味したものとみてよいであらう。南部新書の胡人・衆胡に對し、五代史補が酋長、諸族の字面を用い、衆胡の養育に對して、酋長の下に諸族が傳え養つたとするのは、むしろ前者の方がより自然の筆法であり、原形に近いことを推測せしめる。恐らく五代史補の記事は酋長あるいは諸族のいづれかを本として形成された後次發生のものと考えられる。南部新書の記事が朱耶赤心(李國昌)に筆を起し、五代史補の記載が武皇李克用に筆を發しているのも、この推測を裏付けよう。

さてそれでは朱耶氏の始祖の異狀視された事情は如何であらうか。五代史補ではわづかに、鵬窠の中に生れいたためというにすぎないが、南部新書では各中に小兒あり、衆鳥がその上を飛び交い、果實を銜え來つて與えいたるためという。五代史補のいう鵬窠生誕の傳承については、*Yonk-shah*のいう、鶯が人間に子供を供給する説話<sup>⑩</sup>、ならびにこの種説話が別種獨立の發展をとげた本邦の傳承<sup>⑪</sup>が想起されるが、それらはしばらく措き、契丹國志卷二五、張舜民使北記の鵬窠生獵犬の條に傳える、契丹の雕窠生誕の傳えをあげよう。それによればすなわち、「張）舜民又問う、北地の鵬窠の中、獵犬を生すと、果してしかるやと、答えていう、亦これあり、然れども極めて得難し、今得前一隻あり、その性頗る異なり、獵ごとくに獲るところ常犬に十倍すと」といい、これは、人ならずして獵犬に關するものではない、ひとしく北方民族に關するものであり、同様に鵬窠より出現するものの異狀性をいえるものとして注意したい。<sup>⑫</sup>雕・鷹の類は近時にいたるも狩獵チュルク族にとつて不可缺であり、西域聞見錄卷七、雜錄條に穆爾達坂

方面のことをのべた中にみえる神鷹、あるいはニオラツツエのつたえるシベリヤ・ヤクト族における鶯の守護靈崇拜<sup>⑬</sup>の如く、神格化されている場合も聞々見うけるのであつて、南部新書のいう衆鳥も、鳥一般というが如きものとは考えられず、鵬そのものと考えて差支ないけれど、それが鵬窠という形態をとつたについては、その前提として鵬窠より出現するものの異狀性を考えしめるものがあつたとせねばならない。<sup>⑭</sup>しかし乍ら、五代史補の記事はただ鵬窠生誕という異常出生をいうに止り、これを鳥の養育を傳える南部新書の記載に比する時、その間の變形、五代史補の記事の後次成立の事實がここにも亦認められる。南部新書の傳える鳥の始祖養育の要素こそ重要なのである。

一體、鳥に養育された始祖の傳説といえは、まづ鳥孫の昆莫傳説がひとしくチュルク族のものとしてあげられ、なお周の後稷傳説、さらには高句麗の朱蒙傳説ならびに蒙古源流所見のチベット開國傳説などが地域的に相近いものとしてあげられ、相互の關連が當然考えられてくる。ここで本稿の冒頭に掲げたアジア北族の始祖傳説の三基本類型が

ふたたび想起せらるべきであり、チュルク族始祖傳説の本類型に屬せぬ、鳥の始祖養育傳説の中、昆莫傳説がまづ問題となる。白鳥博士によつて鳥孫の開國傳説と考定され<sup>⑧</sup>た昆莫傳説は、いうまでもなく史記卷一二三大宛傳、漢書卷六一張騫傳に見え、文面は若干相違するが、鳥孫の始祖昆莫がその父を他族(史記では匈奴、漢書では大月氏)に殺され、草中に生きながら棄てられたのに、鳥は鳥肉を喰んでこれに與え、狼はこれに乳やり、ために神聖視されたというのである。白鳥博士は本傳説の狼のモチーフに注目され、ここに鳥孫のチュルク系統論の根據をおかれ、三品彰英博士は本傳説を獸祖系として突厥、高車の開國傳説と同一範疇に屬せしめ、なお蒙古開國の傳説をもここに包含せしめられたが、<sup>⑩</sup>昆莫傳説は狼の要素をもつとはいへ、それは高車、突厥の場合の如き狼人交合傳説ではない。しかもそれは狼と並んで鳥の要素をも含みもち、この點明かな區別を要しよう。さらに昆莫傳説にあつては狼も鳥も共に始祖養育に當てられ、ここに南部新書所傳の朱耶氏始祖傳説との關連が問題視されるのであるが、兩者の關連を攷え

チュルク族の始祖傳説について(岡崎)

るに先立つて、なお、周の後稷傳説との類似點をみておきたい。

后稷傳説は史記卷四周本紀、吳越春秋上・卷第一吳太伯傳にみえ、姜原野に出でて巨人の跡をふんで孕み、后稷を生んだが、不祥としてこれを隘巷、さらに林中にすてて目的を果さず、さらに氷上にすてたところ、「飛鳥その翼を以てこれを覆い薦め」ついに姜原これを神となし、收め養つたという。后稷棄兒について、朱熹(詩經集傳卷六、生民)以來の不祥説があるが、青木正兒博士は、「后稷を隘巷等においたことは獅子が子を谷間に落とすという話と同様、試験を意味する勇武な思想の表れと見る可く」「ギリシャ神話のアキレスの場合と好一對の英雄傳説」と説いて、不祥説を排してオルダリ説を提示され、なおかかる勇武思想をもつ周王朝を西北出身の戎狄と解せられた。<sup>⑪</sup>后稷傳説におけるオルダリの問題は夙にマーセル・グラネー、<sup>⑫</sup>松本信廣教授、さらに白鳥清氏らにより論ぜられ、白鳥氏はさらに后稷・昆莫兩傳説の共通要素を神判の面から抽出すべく試みられた。<sup>⑬</sup>神判の問題もさること乍ら、青木博

士がオルダリの解釋をすすめて周王朝の出身を西北戎狄に求められたのは、素朴な行き方ながら注目すべく、それは内田吟風教授が本傳説を以て周王朝チュルク説の一根據たらしめられたの<sup>⑤</sup>と併せ考えられよう。因に、后稷傳説における外族的要素については夙に内藤博士が、后稷傳説が「果して東北亞細亞の傳説と如何なる關係があるかと云う事は何とも判断が出来ない。或はシナの古代に於いて、北方に居住した諸民族は、やはり東北亞細亞諸國と同一系統の傳説をもつて居たのではあるまいか。然し是は今單一の疑問として提供して置く<sup>⑥</sup>」と説かれた中に問題として提示されているのであつて、青木博士、内田教授により西北戎狄乃至チュルク族との連關を指摘されたのである。しかし乍ら、周王朝チュルク説はなお定説化せず、内藤博士の氏羌系統説も存するのであつて、民族系統よりして后稷傳説を昆莫傳説、さらに朱耶氏始祖傳説に連繫づけることは俄になしえないけれど、昆莫傳説と朱耶氏の始祖傳説との間に連絡點を見出すことは可能視されるのであつて、次にこれを致へてみよう。

四

昆莫、朱耶氏始祖の兩傳説の關連を致えるに當り、烏孫の動向がまづ顧みらるべきである。一體烏孫は漢代における活動著しいが、以後史傳に乏しく、五世紀初頭、蠕蠕の西進によつて擊破されたといわれる<sup>⑦</sup>。しかも、北魏太武帝の太延三年（四三七）には北魏より烏孫えの使節派遣が傳えられ（魏書卷一〇二西域傳）、降つて遼史には會同元年（九三八）八月、烏孫來貢の傳えられるのを始として（卷四太宗紀・卷七〇屬國表）、屬國軍烏孫（卷三二）、烏孫國王府（卷四六）などが見える。もとよりこれらについては、漢代の烏孫を以て類推すべきでなく、ことに、周書以後、正史にたえて見えぬ烏孫が突如として遼史に出現するのは、それ自體再檢討を要するが、<sup>⑧</sup>ともあれ烏孫の稱呼の<sup>⑨</sup>くも後世に傳えられたことに注意すべく、白鳥博士が烏孫語と烏孫の住地よりして烏孫をキルギース族に數え、現今のカラ・キルギース族を以てその後裔と説かれた<sup>⑩</sup>ことも、

烏孫の國家形態消滅後における烏孫餘衆の潜在力を推さしめる。傳説所有部族の長期存続はすなわち傳説そのものの長期にわたる消滅防止を可能視せしめるのであり、かくして烏孫の昆莫傳説と沙陀朱耶氏の始祖傳説との關連はより根據づけられるであらう。

等しくチュルク族といひながら、その始祖傳説には數種の型が見出される。本稿冒頭の、高車、突厥の狼人交合傳説はいわば基本類型として、酉陽雜俎所見の、キルギースの神・牦牛交合傳説<sup>①</sup>、さらに現時傳えられる、キルギースの四十名の侍女と赤犬との交合傳説などこれに大きく包含せらるべきであるが、別にドーンソンが Alai-ud-jin の所傳として記す、回鶻の、天幕より幼兒出づとの傳承は、松本教授によつて三國遺事所收の駕洛國記にのす加羅國始祖首露王の傳説とのモチーフ類似を指摘され<sup>②</sup>、これは異常生誕の面よりして注目される。すなわち、「Caracorum 山より發源せる Tongol, Schinga 兩河の合流地點 Gonnalandjon に二本の樹あり。この兩樹の間に忽然として一個の塚を生じ、天上り一道の光線を放つてこれを照せり。かくてこの

塚は日々成長せり。回鶻人はこの奇事に驚き、敬てこれに近づけり。人の歌えるが如き音樂は聞え來れり。終夜煌々たる光線に包まれ三十歩の距離に達せり。その發達の極に達するや、門あり自ら開きて内に五個の天幕に似たるものありて一條の銀線より垂下せり、而して天幕には各々一人の幼兒ありて坐し、口に含める管によりて滋養をとれり、部族の領袖らは痛く驚きて來りてこの奇蹟を見たり。五人の嬰兒は空氣に觸るるや運動を始め、直にその室を出でたるを以てこれを養育せり。その稍々對談を解するや父母は誰ぞと問ひしかば、すなわち二本の樹を示しに、五人の幼兒は兒女の母に對するが如く往きて兩樹に敬禮を盡せり。」とあり、その末子 *Boum-schin* が王に推戴されたと傳えている<sup>③</sup>。回鶻始祖傳説は異狀出生の面において、朱耶氏始祖傳説と相對比さるべきものをもつけれど、その含む要素は、これを朱耶氏始祖傳説の中、後次成立と推される五代史補のそれとすら全く類を異にするのである。以上、チュルク族始祖傳説の若干の型をみたが、狼、犬、牦牛など獸の要素多き中にあつて、朱耶氏始祖傳説における烏乃至雕の

要素は注目すべきものがあり、特に鳥とその始祖養育という点よりして鳥孫の昆莫傳説との連關は強く意識されるのである。

さて、昆莫傳説と朱耶氏始祖傳説とを對比しつつ、南部新書、五代史補の記事を再び検討するに、五代史補にはただ雕の窠に生れたというにすぎぬに對し、南部新書に記す朱耶氏始祖異常視の事情は、鳥孫の昆莫が野に棄てられて以後の事情と極めてよく一致する。この傳説の類似について、ベルンハイムのいわゆる「傳説の共同財産」と「移動傳説」(Wanderstagen)との問題を考えてよいであろう。ベルンハイムのいわゆる「共同財産」とは、「神仙觀が共通であるという一様の基礎から出て來ている傳説」であり、特に元來一樣な民族から出たものに認められ、これに對して移動傳説とは、「ある人物、場合、時、所から他のそれらのものへ移された傳説的物語、すなわちある所から他の所へ、ある時から他の時へ、ある人物から他の人物へ、いわば移動してゆく傳説」であつて、諸民族の間にみられる大體内容の一致せる諸傳説の大半はこれであるとさ

れる。<sup>⑧</sup> さらに、移動傳説たることが結論されうるためには、「物語られている事柄が二度も三度も左様に起つたり、もしくは話を作られたらうとは、一切の經驗に照してありうべくもないと考へねばならぬ程、それら物語の筋が一致していねばならぬ」し、「またそれら物語が根源的には右の意味の共同財産から出て來たとも考えられぬというのではなくてはならず、且つ次から次へ續いて物語の移動してゆく道筋を證示しなければならぬ」と説かれる。<sup>⑨</sup> 同じくチュルク族の一環をなす鳥孫および沙陀の始祖傳説がベルンハイムのいわゆる共同財産から出てゐることは殆んど確實である。鳥孫はキルギースに、沙陀は西突厥にそれぞれ連るが、沙陀については雜種説も小野川氏により提示され、その名稱はむしろ政治團體の名稱ともみなされぬではないのであつて、西突厥の別部といひ乍ら、さらに他方面との人的關係をも否定しえない。<sup>⑩</sup> ことに唐宋、回鶻瓦壇後、キルギース(黠戛斯)の南遷とその漠北の一時制朝の時期を中心として、キルギース、沙陀兩者の歴史的關係もなお問題となるのであるが、よしや兩者の間に全く人的關

係なしとして、双方の始祖傳説の間に移動が想定されようとも、それは決して他民族への輸出でなく、チュルク民族間における移出に他ならない。

それにしても、既にみた如く、昆莫傳説と朱耶氏始祖傳説とが若干の相違点をもち、さらに朱耶氏の傳説それ自體も南部新書と五代史補によつて所傳を異にするのは如何に解すべきか。漢人記録家によつてかくも所傳を異ならしめられてゐることは傳説そのものの性格を攻えしめる。嘗て柳田國男氏は歴史と傳説との限界を説いて、「傳説はある一部の人が思つてゐるような、やや不確かな歴史では無い。というわけは時代と共に現に傳説の形態とは内容とは變つて來ているから」であるとされ、さらに傳説の合理化について、「この信ずるといふ特徴から、又一つの傳説の特徴が生じてゐる。即ち人知が開け一通り地理や歴史の知識が出來てくると、以前は容易に信じえたものも、無條件に人が信じなくなる。」このために「人が信じうるやうに、傳説の改作が行われる。」とのべられた。傳承の口傳過程における變形については、小川三直氏が蒙古について例示

チュルク族の始祖傳説について(岡崎)

され(蒙古一〇ノ七、「蒙古に於ける口傳の變形様相」、直江廣治氏が華北についてよき具體例をあげられており(中國評論昭和二年一月號「華北村落の傳承運搬者」)、ともにこの方面における勞作として私達の注意をひくが、ここに問題とせる昆莫、朱耶氏始祖兩傳説の間に變化變改の存することは認めえられよう。昆莫傳説では昆莫の野にすてられし事情より説き起すが、南部新書の記事では突如として小兒が出現する。しかも南部新書の記載は、衆鳥の小兒養育をいふ點、昆莫傳説に極めて類似したものがなお存するが、五代史補に至つてはただ雕窠出生をいふにすぎない。すでに推測した如く、五代史補の記事は南部新書のそれよりも後次のものであり、内容はさらに改變を加えられたとみられる。そこでは鳥の養育については全く語らず、雕窠出生といふ異常出生説話に變形され、傳説の原形を失ふこと甚しい。四庫提要の五代史補に對する批評の中、「頗る小説に近し」との文字も併せ考えられ、五代史補における改變の可能性充分といわねばならない。一體、中國史料は、魏略のように外族の習俗に關する記録が比較的詳

四九

細な場合でも、それが漢人の主觀的解釋によるもの多く、果してそれが客觀的事實の報告なるやを迷わしめること少くない。五代史補の記載は異常出生説話の面を備えているが、およそ異常出生説話なるものは漢人の記録に古來屢見する所である。（その例證は出石誠彦氏「シナの帝王説話に關する一考察」支那神話傳説、研究所收にも列擧されている。）五代史補の筆者は、おそらくこの異常出生説話の知識を以て朱耶氏の始祖傳説を解釋、異常出生説話の型にはめるべく、かかる記事をものしたと考えられるが、それは、漢人の側よりする北族始祖傳説の合理化ともいえるであらう。以上、チニルク族始祖傳説の諸類型の中における沙陀朱耶氏の始祖傳説の系譜づけに對する試案を提出するのである。（昭和一八年五月稿、同二五年一二月改稿）

註①内藤博士「蒙古開國の傳説」（藝文四ノ一二・讀史叢錄所收）

さらに「東北亞細亞諸國の開闢傳説」（民族と歴史一ノ四・

東洋文化史研究所收）

②滿蒙史論叢第一册所收「唐代に於ける契丹族の研究」四頁

③耶律鐸の雙溪醉隱集卷二、涿邪山の詩に對する李文田の箋

に、「涿邪は復聲、轉じて朱邪となり、又聲轉じて處月となる」と説き、さらに處月が訛つて川岡となつたという。朱邪（朱耶）が轉じて處月となつたとするのであり、丁謙はこの説を引いてこれに贊する如くであるが（浙江圖書館叢書第一集下、新唐書回紇等國傳地理攷證）、再検討を要しよう。

④舊唐書卷一〇四哥舒翰傳に「哥舒翰は哥舒部落の裔、蕃人多く部落を以て姓を稱し、よつて以て氏となす」とみえるをはじめ、唐に歸化せる塞外人にあつてその例少しとしない。

⑤「蒙古中世史」支那地理歴史大系、支那周邊史上卷所收、四〇七頁

⑥青丘學叢一六「東扶餘の位置と高句麗の開國傳説」

⑦拔野については、管中野川氏が突厥碑文所見の *buynug*

(*Minster* od. *Beumten*) に比され、汪古部の祖たるト國

(元史卷一一八阿剌兀思別吉忽里傳、元文類卷二二) もまた

*buynug* に比すべく説かれている（昭和一五年一月、京大

滿蒙史叢書會例會における談話）のあけておく。

⑧これについては原田淑人博士「西域發見の繪画に見えたる服飾の研究」七六頁・石田幹之助教授「胡旋舞小考」および

「當爐の胡姬」（共に「長安の春」に收む）中田薫博士「唐

教法に於ける外國人の地位」法制史論集第三卷一三六一頁  
以下。

- ⑨ Penkert はその例證をスベロン、印度、ロシアなどに  
わたつて挙げつゝ、 [Handwörterbuch der deutschen  
Märchen unter besonderer Mitwirkung von Johannes  
Bolke, Herausgegeben von Lutz Meckensen. Bd I.  
Adler, A. 2. (S. 16)]

- ⑩ 柳田國男氏「狼と鍛冶屋の姥」(桃太郎の誕生所収四三九—  
四四一頁) 參照

- ⑪ これについてはなお、エス・ペ・トルストフがワシリエフに  
よりつゞ指摘した契丹人の犬崇拜も考へらるべきであらう。  
(蒙古第三號譯載の「現代トルクメン人の下に残れるトーテ  
ミズムと二元的組織」五四—五頁)。

- ⑫ H. Yimvén; Die primitive Kultur des turko-tatari-  
schen Volkes. 7. 205-206. 參照。クリストフはタジック共  
和國の首都ドゥシヤンベ(現在スタリナバド)の市場におけ  
る狩獵用の靴・鷹の賣買を傳えてつゝ、 (“A lone through  
the forbiddanland” 邦譯二四九頁および寫真六一圖)。  
⑬ Nordze; Schamanismus bei den sibirischen Volk-

チユルク族の始祖傳説について(岡崎)

am. 1925. 牧野弘一氏邦譯五七一—八頁。ヤクトト族の崇拜  
拜についてはなお參照、コソコフ「シヤマニズムの研究」(三  
蒙古九卷一號六八—九頁。別に滿洲族シヤーマニズムにおけ  
る鷹神の存在も參照されよう) 凌純聲「松花江下游的赫哲  
族」上册一一—四頁)。

- ⑭ 朝鮮における鶺鴒の靈鳥・吉鳥視と鶺鴒の吉祥視も併せ考えら  
れよう(三品彰英博士「脱解傳説」日鮮神話傳説の研究所  
収)。

- ⑮ 「塞外民族」(東洋思潮所収)三五頁

- ⑯ 史學雜誌一一編一號、一二編一一二號、「鳥孫に就いての考」

(西域史研究上にも收む) および「塞外民族」三五頁

- ⑰ 史林二七卷二號、「滿鮮諸族の始祖神話に就いて」(三)八  
六一—七頁

(本邦において不詳説の繼承としては、たとえば、瑞仙桃源  
「史記抄」(三尻浩校訂本卷二、四一頁)

- ⑱ 支那學四卷二號、「堯舜傳説の構成に就て」一一—三頁(支  
那文學藝術考にも收む)。尤も、青木博士が后稷傳説を英雄  
傳説と解釋されたことは、津田左右吉博士の、中國に英雄傳  
説なしとの論(「左傳の思想史的研究」六八—八九頁)と相

對するが、もともと本邦における英雄傳説の稱呼については高木敏雄氏の使用(『日本傳説集』、『日本神話傳説の研究』)とこれに對する柳田國男氏の批判(『民間傳承論』二二—二頁・『傳説』一七三—四頁)がある。

⑳ *M. (français: La Dépôt de Pentant sur le sol, rines anciennes et oracles mythiques, Revue archéologique, Tome XIX, 1921, p. 305-361.*

㉑ 「古代文化論」一四六—七頁、「支那古姓とトーテムズム」(下)史學一卷二號二六一頁

㉒ 「古代支那に於ける神判の型式」東洋學報一六卷三號。

㉓ 后稷傳説については、オルダリ解釋説の他に、大地の持つ育成的能力に依憑して幼児を直接大地の懷に抱かせることによつて、幼児の健康なる發育を祈念する慣習が定型化したものとする説も注目すべく(原隨園博士「大地の力」史苑一卷三・四合併號六九四—五頁。本論文はギリシヤ史研究第三にも收む)、森三樹三郎助教授が、后稷傳説は貞探の神判を主題とするのでなく、最初から天帝の子たる靈驗を顯示することを目的としたものとされたのも敬聽すべきであらう「支那古代神話」一五二—三頁。

㉔ 東洋思潮所收「古代支那人の民間信仰」二〇—二二頁

㉕ 「古代の蒙古」一七頁

㉖ 「東北亞細亞諸國の感生傳説」(東洋文化史研究所收)二四五頁

㉗ 「支那上古史」八八頁

㉘ 補注⑯に引く白鳥博士の諸論文ならびに松田壽男氏「魏書西域傳の批判と悦般國の方位」(大正大學學報一〇)三一頁

㉙ この問題は遼史所見の西北諸部族の再檢討の中に含めて致したい。なお、ウイットフォオゲルの新著においては、烏孫の國家形態の存續を遼代に證するものなしというに止る  
("History of Chinese society" Leao, p. 108)。

㉚ 補注⑯に引く諸論文参照

㉛ 西陽雜俎卷四。「豎昆(キルギス)部落は狼種に非ず、その先の生ぜし窟は曲漫山の北にあり、自ら謂う、上代に神あり、牝牛とこの窟に交ると、」始祖傳説における牝牛の要素については、ヘルンシユタム、トルストフ兩氏が Omsk, Omsk (牡牛)の轉形とみ、牝牛のトーテムをそこに指摘し(蒙古八四號、A. N. ヘルンシユタム「トルコ族の起源」同誌八五號、トルストフ「現代トルクメン人の下に殘

れるトーテミズムと二元的組織」、事實回鶻人の作になる  
 密書「オグズ・ナメ」にオグズ可汗が牡牛の形に描かれて  
 いる (Bang u. Raehnati, Die Legende von Oguz Dair-  
 han, Sonderausgabe aus den Sitzungen sb. d. Preuss. Aka-  
 d. d. Wil. phil.-hist. Klasse, 1932, XXX.) のと併せ考う  
 べきであらう。

③ キルギースの所傳によれば、Kirgis の名は Kirgiz (四十の義)  
 と Kirz (女の義) の二語よりなる、それはキルギースの王女  
 が侍女四十名と共に長途の旅より歸つた時、その部落は敵に  
 破られて一族離散し、ただ一匹の赤犬が残つていたが、四十  
 名の侍女はこれと交つて各々一子を産み、キルギース隆盛の  
 基をなしたという。(H. Vambery; Das Türkenvolk, s.  
 252.) 白鳥博士は本傳説を以てチュルク諸族の狼傳説と併  
 せ考うべきものとし、狼生、犬生兩傳説の親縁性を指摘せら  
 れている(「烏孫に就いての考」西域史研究上、五六—九頁)

④ 前掲「支那古姓とトーテミズム」(下)二五六頁。

⑤ D'Ohsson; Histoire des Mongols, Tome I. note V.  
 p. 420 et suiv. 田中幸一郎博士譯補「ドゥソン蒙古史」岩

波文庫版上卷三二—三頁。元史卷一二二巴而木阿而忒的斤

チュルク族の始祖傳説について(岡崎)

傳にのす所は文面簡略となつてゐる。

⑥ Bernheim; Einleitung in die Geschichtswissenschaft.

坂口昂・小野鐵二兩氏共譯「歴史とは何ぞや」岩波文庫版一  
 四一頁

⑦ 同右一四—二頁

⑧ 唐宋、キルギースの動向については前田直典氏が若干ふれら  
 れている(東洋洋學報三二卷一號、「十世紀時代の九族韃  
 靼」六六頁以下)。

⑨ 「傳説」六四頁

⑩ 「民間傳承論」二三三頁

### 學 會 予 告

十一月二日(金)

午後

史學研究会大會講演會

三日(土)

午前午後

讀史會他各研究室關係學會

夕方

晚餐會

——以上・於京都大學——

四日(日)

見學(史學研究会主催)

## LEGENDS ON THE ORIGIN OF THE TURKS

—With especial reference to the  
origin of the Chu-ye clan of the  
Sha-t'o tribe—

*Seiro Okazaki*

It is generally accepted by most orientologists that legends on the origin of the Turks should be interpreted in the light of comparison with origin legends of such Ural-Altaic peoples as the Mongols and the Tungus. The legend of the Turks that their ancestor was a wolf married to a human being constitutes a basic pattern of their origin legends. There is, however,

another kind of legends on the origin of the Chu-ye clan of the Sha-t'o tribe that their ancestor was brought up by a bird. This kind of legends is also found among other peoples than the Turkic tribes, and it seems to have been connected with remoter legends of K'un-mo, ancestor of the U-sun. But there is a difference between the description of the Nan-pu-shin-shu and that of the Wu-tai-shih-chi; the former says that the Chu-ye clan's ancestor was brought up by a bird, while the latter that he was born in the nest of an eagle. Such a difference seems to have derived from the rationalistic interpretation by Chinese historians of the origin legend of an alien race.

ヨーロッパの使節を引見するムガル皇帝

所在地 ベナレス、バブ・シターラーム・サフ蔵

製作年代 十七世紀

大きさ 13 feet 4 7/8 × 9 feet 6 7/8

印度デリーに都したムガル王朝の輝かしい遺産は、アラベスクの回教建築と五彩をちりばめた細密画である。その細密画には好んで世俗的な題材が選ばれ、中でも肖像はムガル画家の特技であった。もちろん作品も多く、歴史家は歴代のムガル皇帝や二世紀にわたる高官の風貌をそれによつて知ることができるといわれている。この画はアクバル帝の孫、シャール・ジャハーン帝 (Shah Jahan 1627-1658) が、はるばる渡航せるポルトガルの使節一行を引見する場面で、シムメトリカルな構図と絢爛たる色彩とが、宮廷の威儀と華やかさを遺憾なく示している。使節團の男女は今や画面の左下の一隅から皇帝の前に進もうとしている。皇帝はしかし横を向いている。横向きはムガル肖像画家の常套的手段であった。それ故これは、歴史的事件をあらわした肖像画ということができる。容貌のこれほど個性にみちた細密描寫は東洋では類がない。(上野照夫)